

CMC (Computer-Mediated Communication) における自然言語使用 の能力 (literacy)

平本 毅

立命館大学社会学研究科博士課程後期過程

キーワード：CMC，能力，自然言語使用の社会性

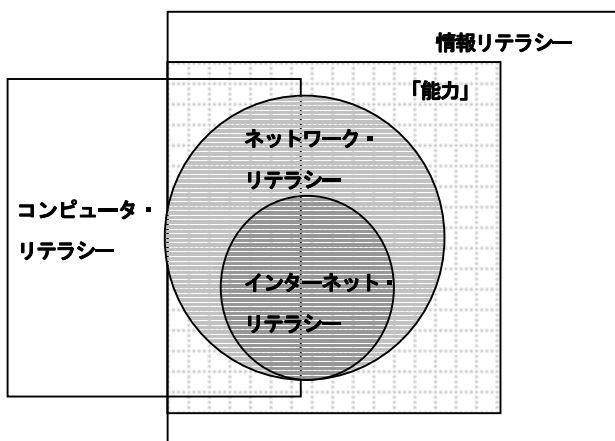
本研究では、CMCでの自然言語使用に関して参与者の「能力 (CMCに関するリテラシー)」が果たす役割についての考察を行い、社会科学の立場からCMCにおける参与者間の「能力」をめぐるインタラクションを分析することの意味を提示する。社会心理学、社会学、社会言語学などの社会科学系のCMC研究では、これまで主にCMCとFTF (Face to Face：対面) 状況とのコミュニケーション特性の違いが主題として取り扱われてきた。そして、その違いがコミュニケーションの内容や構造にどのような影響を与えるのかが検討され、社会的な作業に役立つツールとしてのCMCの活用方法がそれぞれの立場から考案されてきた。例えば、社会心理学の「社会的手がかりの減少 (reduced social cues)」モデル (Kiesler, Siegel, McGuire, 1984) は、FTF状況ならば手に入れることができる相手の声、社会的地位、容姿などの「社会的手がかり」のCMCにおける喪失がコミュニケーションに効率性と参加機会の平等性をもたらし、よって電子会議室などの多人数参加型意思決定システムが有効になることを主張している。また、社会学の視点からはCMCにおける情報流通の双方向性や物理的・時間的制約の無効化性、ストック性などが注目され、サイバースペースのコミュニティにハーバーマスの意味での公共圏の役割を担わせることの可能性が探られている。C S C L (Computer-Supported Cooperative Learning：コンピュータを利用した共同学習) やC S C W (Computer-Supported Cooperative Work：コンピュータを利用した共同作業) などの人間工学系の分野では、身体的に共存 (co-presence) しない者どうしの遠隔共同作業に役立てるための、CMCを取り入れたより効率的・効果的なシステムの構築が社会科学系の研究者も参入して探求されている。しかし、これらのケースにおいてそのシステムが作動する上で「社会的手がかり」の減少、情報の双方性、物理的・時間的距離の無効化性、ストック性といったCMCのコミュニケーション特性がそれぞれ有効に働くためには、当該の自然言語使用をCMCとして成り立たせるためのある種の実践 (practice) がその場において社会的に組織化される必要がある。言い換えれば、システムに実効をもたらすのはFTFかCMCかという本質的な形態の違いではなく、そのコ

ミュニケーション特性を引き出すためのユーザー間での調整的なインタラクションである。例えば、丸山 (1999) によれば、CMC参与者は「電子チャット」、「BBS」、「電子会議室」といったコミュニケーション様式のそれぞれにおいて、それらがみなさほど変わらない構造のプログラムによって記述されているにもかかわらず、「電子チャット」を「電子チャット」、「BBS」を「BBS」として成り立たせるようにコミュニケーション内容を協働的に組織化することによってそれぞれの特性を引き出す実践を行っている。また、これらの例のような明示的なインタラクションとしてのCMCのみならず、サイバースペース上で自然言語を「読む」という行為にもそれを可能にする実践が埋め込まれている。McHoul & Roe (1996) やHave (1999) は、ハイパーテキスト論を論じるうえで、ハイパーテキストのもつハイパーリンク機能や検索機能といった特性の革新性を強調する、楽観的なハイパーテキスト礼賛の傾向に批判を加えている。ハイパーテキスト礼賛の立場からみると、旧来の印刷テキストにおける「読み」は「固定 (rigid)」された「直線的 (linear)」なものであり、読者は著者の意図に従った読み方しかできないという意味で書物の権威性 (authority) に従わなければならないが、対照的にハイパーテキストにおけるそれは「自由 (free)」かつ「非直線的 (non-linear)」なものであり、ここにおいて読者は「読み手」としての自主性を回復することになるとされる。しかし、McHoul & Roe とHave は、この二分法は誇張されすぎていると考えている。旧来のテキストにおける「読み」も、ハイパーテキストにおけるそれも、「固定」、「直線的」、「自由」、「非直線的」の要素が混在したものであり、その区別は旧来のテキストかハイパーテキストかによって決定されるのではなく、「読み」の実践自体に埋め込まれている。さらに、CMCにおいて自然言語を使用する主体で「あること」もしくは「ないこと」、つまりサイバースペースにおいて「読む」「書く」「話す」といった行為を行う成員個々の同一性/匿名性の確立も所与のものではなく、実践によって獲得されるものである。筒井・秋吉 (2000) や是永 (1999) は、CMCにおいて自明のものと考えられているコミュニケーションにおける匿名性が、実際には相互行為的实践を通じて獲得されるものであり、

それ自体がコミュニケーションの前提となっているわけではないことを主張している。「社会的な手がかかり」の欠けたCMCにおいて、HN（ハンドルネーム）やIPアドレスから文体まで、わずかな「手がかかり」を操作することによって匿名性や同一性が社会的に達成されるのである。

そして、以上のような実践の可否の鍵となるのが、各参加者の持つ「能力 (literacy)」である。FTFでの自然言語使用に行為者の言語能力やコミュニケーション・スキルが作用するのと同じように、CMCの自然言語使用においても「能力」が作用する。例えば、「読み」の実践の例では、「読み手」のリテラシーの高さが、ハイパーテキストを「一行一行追う」のみならず、「その構造を、構築された情報のフローとして活動的に」見る (see) ことを可能にする (Have, 1999; 281)。ハイパーテキストを「読む」という実践において、テキストの構成自身が「書き手」と「読み手」とのインタラクションのなかで構築されていく (Heath, Nicholls, vom Lehn, 2000; 22) ことになるが、その構成のされかたは、「読み手」のハイパーテキストに対するリテラシーの高さによって規定されているのである。ここでいう「能力」とは、参加者が身につけているすべての属性のうちでCMCという行為に影響を与える部分、例えばCMCについての知識 (knowledge)、力量 (competence)、技術 (skill) などの総称である。コンピュータ・リテラシー (コンピュータのハードウェア操作能力)、ネットワーク・リテラシー、インターネット・リテラシー、情報リテラシー (それぞれネットワーク・インターネット・情報の性質を理解し、活用する能力) などのコンピュータ使用におけるリテラシーのうちから、CMCという行為を行ううえでのリテラシーを抽出したものがその範囲となる。

図：CMCを実践するための「能力」の範囲



「能力」は、ただ個人的なスキルのみを意味するのではなく、いわゆる「社会的スキル (social skills) (Argyle, 1992)」を含む。「社会的スキル」とは、対人インタラクションと社会生活上のスキルのことである。例えば、いくらキーボード操作能力

(コンピュータ・リテラシー)が高く、他ユーザーより量的に多くの発言を行うことができたとしても、「BBS」を「電子チャット」のように利用するユーザーには、マナー違反として注意が与えられることになる。さらに、このような「社会的スキル」を獲得するためにはCMCについての社会的・文化的熟達が必要になる。Gumperzによると、自然言語を使いこなして他者と円滑なコミュニケーションを行うためには、ただ統語論や意味論上完璧に当該言語を使用できさえすればよいというわけではない (Gumperz, 1982)。発話のプロソディ (リズム、イントネーション、アクセント等) やジェスチャー (うなずき、指差し等) といった文脈化手がかかり (contextualization cues: 当該の行為に付与される文脈情報) や主題的結束性 (thematic cohesion: 一節一節、一文一文の発話や記述を主題的に一貫したものと結合する装置) の成員による背景知識としての共有がなければ、いくら当該の発話や記述が文法上正しいものであっても両者の理解に食い違いが生じることがあり、このような背景知識は各文化や言語体系に固有のものである。Gumperzは、そのような例としてネイティブ・アメリカンの英語とそうでない者の (文法上は完璧な) 英語との間の食い違いを挙げている。さらに、Gumperzによれば口語を「書かれた」テキストに変換するという作業にもコミュニケーション能力 (communicative competence) が必要になる (Gumperz, 1984)。「書く」という作業を行うためには、①まず当該言語の口語を使いこなすことができなければならない、②うなずき等、対話者による瞬間瞬間のフィードバックに頼ることができない、③プロソディやジェスチャー等の非/準言語情報に頼ることができない、という条件をクリアしなければならない。当然、このような作業には、当該の言語使用についての社会的・文化的習熟が必要になる。

どの言語を使用するにしろ、サイバースペースにおいて参加者はただFTF状況での自然言語使用とそっくりそのまま同じことをCMCでの会話で行っているわけではない。つまり、CMCにおいて参加者はまず当該言語の固有文化に習熟し、その上でCMCの固有文化にあわせて「書く」ことに習熟が必要になる。社会科学系のCMC研究にとって重要なのは、CMCでの自然言語使用を可能にするこのような「能力」が、個々人の独立した属性ではなく、コミュニケーションのその場 (in situ) で社会的に編成されるものだということである。Garfinkel & Sacks (1970) によれば、ある社会の成員であることこの条件は自然言語に習熟していることだが、その自然言語への習熟は徹頭徹尾その場その場で成し遂げられる。例えば、平本 (2003) の例ではCMC参加者がジャーゴン (俗語) の使用をインタラクションのなかで相互に調整していくことによって、「上級者 (「能力」の高いもの)」と「初心者 (「能力」の低い者)」の人カテゴリー化の「手がかかり」を提供しあい、コミュニケーションを円滑に組織化していくという実践が観察された。参加

者間での「能力」やその差についてのインタラクションを社会的に科学的に分析し、CMCを可能にする実践を明らかにすることが求められている。

文献

- 1) Garfinkel, H. & Sacks, H. 1970, "On formal structures of practical actions" In Garfinkel, H. (ed.), 1986, *Ethnomethodological Studies of Work*, London: Routledge & Kegan Paul, pp160-193.
- 2) Gumperz, J. 1982, "The Linguistic Bases of Communicative Competence" In Tanner, D (ed.) *Analyzing Discourse Text and Talk*, G. U. R. T(Georgetown University Round Table), Washington, DC: Georgetown University Press, pp323-334.
- 3) Gumperz, J. , Kaltman, H. & O' Connor, C. 1984, "Cohesion in Spoken and Written Discourse: Ethnic Style and the Transition to Literacy" In Tannen, D (ed.), *Cohesion in Spoken and Written Discourse*, Norwood, NJ: Ablex Publishing, pp3-19.
- 4) Have, T. 1999, "Structuring Writing for Reading: Hypertext and the Reading Body" *Human Studies*, 22, pp273-98.
- 5) Heath, C. , Luff, P. , Nicholls, G. & vom Lehn, D. 2000, "Textuality and interaction: The collaborative production of news stories" .
http://www.utc.fr/arco/publications/intellectica/n30/30_05_Heath.pdf
- 6) Kiesler, S. , Siegel, J. & McGuire, T. W. 1984, "Social psychological aspects of computer-mediated communication" *American Psychologist*, 39 (10) , pp1123-1134.
- 7) McHoul, A. & Roe, P. 1996, "Hypertext and Reading Cognition" .
<http://wwwmcc.murdoch.edu.au/ReadingRoom/VID/cognition.html>
- 8) 是永論, 2002, 葛藤する文脈と相互行為分析の可能性:「広告」における理解の実践をめぐって, *応用社会学研究*, 44, pp23-46.
- 9) 筒井淳也・秋吉美都, 2000, サイバースペースにおける知識-権力の問題: 相互行為論的記述の試み, 第73回日本社会学会報告。
http://www004.upp.so-net.ne.jp/tsutsui/research/conferece/jsa_2000/jsa_2000.html
- 10) 平本毅, 2003, 社会的手がかりの減少モデルから考察する, CMCにおける成員カテゴリー化装置運用法の問題, 日本

社会心理学会第44回大会論文集, pp402-403。

- 11) 丸山健夫, 1999, インターネット社会とエスノメソドロジー, 武庫川女子大学文学部五十周年記念論文集, pp443-451.